

# 第3章 1. 日本の風土と伝統

## 1. 日本の風土

・和辻哲郎(1889-1960)の文化類型……『風土』(1931年著、戦後の日本文化論の先駆となる)

日本は、**モンスーン型**・

概ね、自然は恵みをもたらすものだが、ときおり一過性の暴威をふるう  
→自然と調和し、**受容的・忍従的**に生きる

	モンスーン型	砂漠型	牧場型
地域	南・東アジア	北アフリカ・西アジア	ヨーロッパ
自然	恵み・一過性の暴威 水稲などの農耕	乾燥した厳しい自然 遊牧	牧草、穏やかな自然 農耕・牧畜
生活	定住性	移動性	開拓・定住性
対自然	受容的・忍従的	戦闘的・対抗的	主体的・征服的
宗教	仏教、ヒンドゥー教	ユダヤ教、イスラム	キリスト教発展

※このような類型区分に対しては、**非科学的「悪しき環境決定論」**との批判も

・**照葉樹林文化論**……中尾佐助(植物学)・佐々木高明(文化人類学)らが20世紀半頃に提唱  
中国の雲南・華南から台湾をへて西日本に広がる照葉樹林帯には  
稲作とも関わる共通の文化要素がある、と説く。  
→これも21世紀に入ると批判も多い。

※照葉樹林……関東甲信・西日本の植生(シイ・カシなど葉の表面の照りが強い常緑広葉樹)  
↔東北・北海道西部は落葉広葉樹林(世界遺産「白神山地」はブナの原生林)

## 2. 日本の美意識

- ・「**わび**」……「物質的な不足」からくる風流。**千利休**(茶道)
- ・「**さび**」……「心情的な孤独」からくる風流。**松尾芭蕉**(俳句)
- ・「もののあはれ」……何かに触れておこる深い感動。平安文学
- ・「無常観」……仏教的(平家物語・方丈記・奥の細道など)
- ・「**幽玄**」……趣が奥深くはかり知れないこと。

**世阿弥**の能楽 →茶道、和歌・連歌にも

## 3. 「ハレ」と「ケ」

**ハレ**の日……改まった特別な日

年中行事(祭り)、通過儀礼(結婚式、成人など)

**ケ**の日……日常・普段の日

ケ=気=自然の恵み →気枯れ=ケガレ

## 4. 罪と清明心

・**清く明き心(清明心)**

明=赤=純粋・清らか、隠し事や嘘偽りが無い

古代日本の倫理意識(古事記、万葉集などに見られる)

→誠(伊藤仁斎)、正直(石田梅岩)

・「**罪**」**「穢れ」**……一時的なものと考え、その都度**「禊」****「祓い」**で浄める

↔キリスト教の原罪のような深刻な罪意識はない

共同体の和の破壊、災害など

↳教科書に例示された「畦を壊すなど農業共同体の秩序を破壊すること」というのは、  
天照大神が天の岩屋に閉じこもるキッカケとなった須佐之男命の暴虐のこと

## 5. 記紀神話の世界観

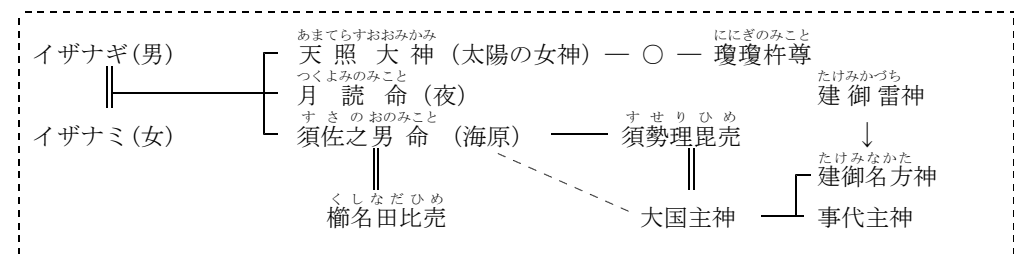
高天原(神の世界) — 葦原中国(人の世界) — 黄泉の国(死後の世界) 往来可能

※これは神話の世界観であり、民俗学的民衆の世界観は別のもの(→民俗学)

※「古事記」冒頭……天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、…

→天地はもともとあった(神が造ったわけではない)。

神も**「成る」**(どこからか自然に登場する)存在である。



イザナギ・イザナミによって国生み・神生みが行われたが、最後にイザナミは火の神を産んで死ぬ。  
イザナギはイザナミに会いに黄泉国へ行き、その帰路、身を清めた際に天照大神ら“三貴子”を産む。  
須佐之男命が高天原で暴虐を働いたため、天照大神は天岩戸に閉じこもる。その後、高天原を追放された  
須佐之男命は出雲で櫛名田姫を助けるために八岐大蛇を退治し、天叢雲剣を得て天照大神に献上する。

「因幡の白兔」を助けた大国主は、須佐之男命の娘・須勢理姫とともに出雲を中心に葦原中国の国造りを完成する。

のち天照大神は、大国主に対して国譲りを要求し、建御雷神を差し向ける。大国主とその長男・事代主は国譲りに承諾するが、次男の建御名方は承諾せず建御雷と戦うが、諏訪湖畔で降伏する。

その後、天照大神は、孫の瓊瓊杵尊を葦原中国へと遣わし治めさせる(天孫降臨)。

その子孫の一人が、瀬戸内経由で大和に侵攻し、初代・神武天皇となる。

## 6. 日本人の特性

◎土居健郎 (1920-2009) ……著書『甘えの構造』(1971)

「甘え」……「周りの人に好かれて依存できるようにしたい」という日本人特有の感情。  
親子関係はその理想な形であり、他の人間関係においても同様の親密さを求める。

“他者の好意”への依存 = 他者との分離を否定し、他人や集団に寄りかかる  
「甘える」日本人は、独立した「個人」になり得ない、とも言える。

◎中根千枝 (1926 ~、女性) ……著書『タテ社会の人間関係』(1967)

日本の集団構造は、どれも同じ。能力差よりも年功序列 (タテ社会)

◎ルース・ベネディクト (米、1887-1948、女性)

著書『菊と刀』(The Chrysanthemum and the Sword、1946)

日本人は「恥の文化」……「他人に恥ずかしくない」行動を重視  
欧米人は「罪の文化」……「自分の良心に恥じない」行動を重視

文化人類学者としての主著『文化の型』(1934)では文化の相対主義を表現した。  
太平洋戦争中は、戦争情報局に招集され、対日戦争および占領政策にかかる意思決定を担当する  
日本班チーフとなった。その時の報告書をもとに、戦後にまとめたのが「菊と刀」である。  
彼女は、訪日経験はなかったが、日系移民との交流はあった。  
内容については的外れな点もあるが、分量の多くを占める「恩」「義理」についての分析は鋭い。

「恩」=恩返しの義務負債(恩を着せられる)。恩が徳なのではなく報恩が徳。  
忠節は主君への「義理」、侮辱に対する復習は我が名に対する「義理」(忠臣蔵物語)

◎丸山眞男 (1914-96)

東京大学法学部政治学科卒。日本政治思想史を専攻。  
戦時中は江戸時代の儒学史(特に荻生徂徠)を研究 →『日本政治思想史研究』(1952)  
戦後、雑誌「世界」に「超国家主義の論理と心理」を発表(1946.5)  
近代市民社会の未成熟が、「無責任の体型」であるファシズムを生み出した、と説く。  
他に、福澤諭吉、佐久間象山、中江兆民などの明治思想研究も。

著書「日本の思想」(岩波新書、1961)

「日本の思想」(1957)、「近代日本の思想と文学」(1959)  
「思想のあり方について」(1957)、『『である』ことと『する』こと』(1958)  
「歴史意識における『古層』」(1972)……「忠誠と反逆」(筑摩書房、1992 所収)  
「原型・古層・執拗低音」(1981) ……「日本文化のかくれた形」(岩波現代文庫、共著所収)

「日本の思想」……日本には“思想史”と呼べるものが無い!

日本では、全ての思想的立場がそれとの関係で自己を歴史的に位置づけるような座標軸にあたる思想的  
伝統は形成されなかった。

思想が、対決と蓄積の上に歴史的に構造化されない。論争の成果を共有財産として受け継がず、後に  
また同じ論争を最初から始める。西欧で長年取り上げてきたテーマについても同様である。

日本人の思考・発想の様式には、仏教的・儒教的・西欧的などあらゆる思想の断片が、雑然と同居し、  
相互の論理的な関係と占めるべき位置とが一向に判然としていない。  
(「雑居」しているだけで、互いに交わらないから、「雑種」にすらなり得ない。)

過去は自覚的に対象化されて現在の中に「止揚」されていないからこそ、それはいわば背後から現在の  
中にすべりこむのである。思想が伝統として蓄積されないということと、「伝統」思想のズルズルべったり  
の無関連な潜入とは実は同じことの両面にすぎない。

一定の時間的順序で入ってきたいろいろな思想が、ただ精神の内面における空間的配置をかえるだけで、  
いわば無時間的に併存する傾向をもつことによって、却ってそれらは歴史的な構造化を失ってしまう。

新たなもの、本来異質なもののまでが過去との十全な対決なしにつぎつぎと摂取されるから、新たなもの  
の勝利はおどろくほどに早い。過去は過去として自覚的に現在と向き合わずに傍らに押しやられ、あるいは  
下に沈降して意識から消え「忘却」されるので、それは時あって突如として「思い出」として噴出する  
ことになる。

「歴史意識における『古層』」、「原型・古層・執拗低音」

原型とか古層という言葉から連想される“土台”のようなものは日本思想には無い。  
執拗低音は、低音部に一定の旋律が執拗に繰り返される、というものである。  
日本思想の主旋律は圧倒的に中国や西欧からの外来思想が多い。  
それらが入れ替わり変化する、その変化のパターンに、何度も繰り返される音型がある。

執拗低音 (basso ostinato) = 「なる」「つぎ」「いきほい」 (→記紀神話)

自然発生的に「成り」、「つぎつぎ」と「いきほい(勢)」で展開する。

“創造神”はいない。“なりゆきまかせ”の思考。-----

「思想のあり方について」

欧米は「ササラ型社会」……異質な人々が広く横に連帯できる。  
日本は「タコツボ型社会」…同種の人たちだけで狭く閉じたグループを作り  
それらグループ同士の横のつながりが無い。

『『である』ことと『する』こと』

他人を「何をする人か」ではなく「何である人か」で判断する。  
知り合って「身内である人」にしてしまうことによって付き合う。  
→アカの他人との付き合い、というものは無いに等しい。  
よってアカの他人同士のモラルも無い。(←恥の文化)